



## 採択される科研費申請ノウハウ

—審査から見た申請書のポイント—

岡田益男 著

アグネ技術センター 3,800円+税 B5判・並製 180頁

解説書

お薦め度

3

☆☆☆★★

評者も、この表題と「科研費のベテランがついにノウハウ公開！」との帯広告にひかれて買ってしまった一人である。ご存じのように、科研費（科学研究費助成事業）というのは、文部科学省が行っている学術研究に対する競争的資金助成事業で、これがなければ研究が回らない、天文学業界でもたいへんお世話になっている研究資金である。本書は、科研費とそれに密接な関係のある日本学術振興会特別研究員（いわゆる学振DC, PD）に採択されるには何が必要かをまとめたノウハウ本である。著者は現・八戸工業高等専門学校長、東北大名誉教授で材料工学がご専門、もちろん、外部資金審査歴多数のこの道のベテランである。本書は、例えば申請書の字の大きさや図の多少といった申請書の見え方もそうだが、これが主ではなく、戦略の立て方とそれを申請にどう反映させるかを扱っている。著者の言葉を借りれば、「科研費は研究者がこれから研究を実施したい『熱い思い』を訴えるものである」（科研費のアウトライン）、「科学論文と異なり、（略）必ずしも研究提案が成功するとは限らず、それでもどのような視点で、どのように挑戦するかという熱い思いを記載し」（採択される申請書の書き方）、「申請研究結果の普遍性、波及性、学際性などを、思い切って大風呂敷を広げるつもりで示す」（申請書の各項目の書き方）など、審査員が真剣に読んでもらえる申請書にするためのノウハウを込めている。ただ、科研費は、採択、配分などの実施方法、さらには

審査委員名も審査終了後には公開されており、公募要項を読み、科研費のWEBページを分析的に読めば、本書の内容の多くは読み取れるだろう。そうはいても、「多くの研究機関の研究者が基盤研究と、この挑戦的萌芽研究に併願する傾向がある」「挑戦的萌芽研究は、採択率は25.8%と高いようであるが、基盤研究（S・A・B）や若手（A）（評者注：これらは研究資金で小規模の基盤研究（C）や若手（B）と比べて激戦である）との重複申請が可能であり、レベルが高く激戦種目である。」とか言われると、「やっぱりね」と「ほー」が同居する。これまでに受けた研究費とその成果等として「多くの外部資金獲得者は関連研究のみを、数少ない外部資金の申請者は拡大解釈して、できるだけ多くの事例を記載する」のだといわれると妙に安心したりする。つまり、私のように天文学の研究をそれなりの期間続けてきた者にとっても、自分なりの分析、自分なりの戦略といった科研費への方法論をチェックする機会を与えてくれる。もちろん、これから研究者のキャリアを始める若手にとっては、科研費の全体的考え方とともに、実践的ノウハウを知る良い手引き書となっている。

この話題に興味をもつ天文月報の読者の割合を考えると、☆は三つとしたが、研究者や研究者を目指す大学院生には有意義な一冊と評価する。

富阪幸治（国立天文台理論研究部）